

創世記49－50章 「イスラエルの信仰による死」

1A イスラエルの祝福 49

1B 十二部族への預言 1－28

1C 終わりの日 1－2

2C ユダに置かれる王権 3－12

3C 地の豊かさと敵との戦い 13－21

4C 若枝からの祝福 22－28

2B ヘブロン墓 29－33

2A ヨセフの継承 50

1B 遺体の埋葬 1－14

1C ミイラ化 1－3

2C エジプト式の葬儀 4－14

2B 兄弟たちへの養い 15－26

1C 慰めによる和解 15－21

2C 約束の地への信仰 22－26

本文

創世記 49 章を開いてください。私たちの創世記の通読は、ついに今日で最後になります。この前は、ヤコブの死期が近づいて、彼がヨセフの息子二人を自分の息子にする、すなわち養子にしたところを見ました。そして彼らを祝福しました。

そしてヤコブは、自分の名がアブラハム、イサクの名に連なることを祈り、また強調しました。そのことによって初めて、イスラエルという民が、アブラハムの祝福の契約を受け継ぐ者になります。そして 49 章は、この祝福、すなわちイスラエルの十二人の息子に対する祝福になります。

1A イスラエルの祝福 49

1B 十二部族への預言 1－28

1C 終わりの日 1－2

¹ ヤコブは息子たちを呼び寄せて言った。「集まりなさい。私は、終わりの日に おまえたちに起こることを告げよう。² ヤコブの子どもたちよ、集まって聞け。おまえたちの父イスラエルに聞け。

ヤコブは、これから祝福していきますが、聞けと二度、強調しています。集まって聞け、と言っていますが、力をふりしぼって声を出しますから、よく聞こえるようにそうしなさい、ということです。

そして、「**終わりの日に おまえたちに起こること**」であります。彼らのことだけでなく、彼らの後の子孫、彼らそれぞれが族長となり、それぞれの部族に対する預言となります。そして、終わりですから、私たちの時代を超えて、将来のことに及ぶまでの預言なのです。

主はユニークな方です。初めの書である創世記で、終わりのことを語られます。「イザ 46:10 わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。」それは、神が永遠の方であり、終わりのことまですべてを知って、それで初めにご計画をされています。すべてを支配されていることを示すために、敢えて初めに終わりのことを語られるのです。

実に、終わりの書である黙示録に、ヤコブが預言したことが成就している幻があります。「21:12 都には、大きな高い城壁があり、十二の門があった。門の上には十二人の御使いがいた。また、名前が刻まれていたが、それはイスラエルの子らの十二部族の名前であった。」天のエルサレムの門に、イスラエル十二部族の名が刻まれているのです。パウロは、「神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません。(ロマ 11:2)」と言いました。

終わりの日にはイスラエルの名は覚えられなくなると知っていたら、初めからイスラエルを選ばなかったのです。私たち異邦人は、キリストにあってイスラエルの祝福にあずかる者となりますが、それがイスラエルがイスラエルでなくなることはなく、民は生き続けます。

ところで、ヤコブはヘブル 11 章 21 節によれば「**信仰によって**」それを行なったとあります。確かに後に起こることを、その目に見ていないことを確信して、語りました。書かれている神のことばである預言とは性質が異なりますが、それでも、御霊によって預言の賜物が教会に与えられています。目に見えないことであっても、確信が与えられ、それを信仰によって口にするのです。勧め、励まし慰め、また建て上げるために、語ります。

2C ユダに置かれる王権 3-12

十二人の息子に対する預言ですが、大きな流れがあります。それは、ユダに対する祝福と、ヨセフに対する祝福が突出していることです。特にヨセフが、より多くの祝福を受けており、イスラエルからメシアが現れるという預言も出てきます。そしてユダも、王権が彼から離れないという預言があり、そこからメシアが出て来る預言になっています。

³ ルベンよ、おまえはわが長子。わが力、わが活力の初穂。威厳と力強さでまさる者。⁴ だが、おまえは水のように奔放で、おまえはほかの者にまさることはない。おまえは父の床に上り、そのとき、それを汚した。——彼は私の寝床に上ったのだ。

ルベンは、ヤコブがレアによって生んだ、初めの子です。ですから長子の権利があります。彼が、ヤコブからのものを受け継ぐのです。確かに彼には、長子としての活力がありました。威厳と力強さがありました。

けれども、「**水のように奔放**」だと言っています。大きなものが任されているのに、自分のたった今の感情で、すぐに動いてしまう姿です。自分自身も、自分に任されていることも、管理できていない姿です。そして、何を目的にしているのか分からない姿です。ある牧師さんが、自分の教会の賛美リーダーについて、「**水のように変わる**」と表していました。その人は、いろいろな人に声をかけ、たちまち賛美チームを形成して、演奏の技術もあり、歌唱力もありました。けれども、突如として辞めます。違うことをやり始めます。それで、水のように変わると評しました。

ルベンが、まさにそのようなことをしました。ヤコブの最愛の妻ラケルが、ベツレヘムへの道で死にました。ベニヤミンを生み、死にました。その悲しみにある時に、よりによって、ラケルの女奴隷であり、ヤコブの側女であるビルハと寝たのです。当時、父の妻や側めと寝ることは、性的な罪だけでなく、父から相続を奪い取る意味合いがあります。アブサロムが、ダビデが逃げた後に、宮殿に残っていた彼のそばめと、白昼堂々、寝たのは、エルサレムの実権をアブサロムが握ったことを示すものでした。イエスが喩えで語られた、放蕩息子のように、父の生前に分け前が欲しがったのと同じことを、ルベンは行いました。

それで、「**おまえはほかの者にまさることはない**」と宣言されます。長子としての勢いについては、ユダに移され、長子の権利はヨセフに譲られました。第一歴代誌で、こうまとめられています。「**5:1-2 ルベンは長子であったが、父の寝床を汚したことにより、その長子の権利はイスラエルの子ヨセフの子に与えられた。それで、彼は系図には長子の権利を持つ者として記載されていない。2 ユダは彼の兄弟たちの間で勢いを増し、君たる者もそこから出たが、長子の権利はヨセフのものとなった。**」

ルベン族は、死海の東を相続の割り当て地として受け取りますが、さしたる役割を果たすこともできず、人数も減っていきます。後にモーセは、「**ルベンは生きて、死なないように。その人数が少なくても。(申命 33:6)**」と祈らなければならなかったほどです。

⁵ シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の武器。⁶ わがたましいよ、彼らの密議に加わるな。わが栄光よ、彼らの集いに連なるな。彼らは怒りに任せて人を殺し、思いのままに牛の足の筋を切った。⁷ のろわれよ、彼らの激しい怒り、彼らの凄まじい憤りは。私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう。

ルベンの次に生まれたのがシメオン、三男がレビです。ヤコブは、祝福は語らず、すぐに、暴虐

について、その激しい怒りについて呪いを宣言します。自制のない怒りについて近づいてはならないと、警告します。パウロも、聖霊を悲しめるものとして、憤りを捨て去りなさいと勧めています。「エペ 4:30-31 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。31 無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしりなどを、一切の悪意とともに、すべて捨て去りなさい。」

彼らが行ったことは、シェケムにおける虐殺と略奪です。同じレアから生まれた娘、ディナ、彼女にとっての妹が、凌辱を受けたからです。

それゆえ、「イスラエルの中に散らそう」とヤコブは宣言します。これは、相続地が自分たちに与えられないことを意味します。シメオン族は、ユダ族の割り当て地の中に住むことになります。そしてレビ族は、主の聖所に仕える者たちとなりました。モーセとアロンはレビ族であり、アロンの直系は祭司職を生み出します。彼らは、イスラエル各地にレビ人の住む町々が与えられましたが、相続地は与えられていません。(ヨシュア 19:9)

レビ族については、神の憐れみがあると思います。相続地については、割り当てはありませんが、主ご自身が言われたように、主のご臨在で仕えることそのものが相続だということです。ただ、モーセについて、父レビの持つその怒りが出てきたものがありました。イスラエル人がエジプト人に虐げられているのを見て、そのエジプト人を殺しました。また、荒野の旅をしている時、主が岩に命じなさいと言われたのに、怒りにまかせて岩を杖で二度、打ちました。それでモーセは、約束の地に入れないと主に宣言されたのです。

⁸ ユダよ、兄弟たちはおまえをたたえる。おまえの手は敵の首の上にあり、おまえの父の子らはおまえを伏し拝む。

レアからの四男がユダです。ユダは「ほめたたえる」という意味がありますが、その名のごとく、ほめたたえられます。他の部族の者たちも、イスラエル人が彼の前に伏し拝むとありますが、それはユダから王が出て来るからです。「おまえの手は敵の首の上にあり」というのは、敵を制圧するということです。イスラエルの民を救う王として、あがめられます。

ユダは、ルベンが持っていなかった指導力を発揮します。ベニヤミンを取り戻すべく、自分自身が奴隷になって保証すると言いました。また、エジプトにヤコブの家が下る時に、まずユダがエジプトに行き、ゴシェンの地でヤコブたちが来る用意をしました。その彼の特質が、ユダ族全体に広がります。その一部族で国ができるほど人々の数は増え、荒野の旅でも戦闘に立ち、約束の地に入ってから、ユダが戦いの先頭に立ちました(士師 1:1-2)。

⁹ ユダは獅子の子。わが子よ、おまえは獲物によって成長する。雄獅子のように、雌獅子のように、うずくまり、身を伏せる。だれがこれを起こせるだろうか。

これからの旧約聖書の話は、モーセによって律法が与えられた後、ダビデが王になるところに至ります。ユダからダビデが出て来る系図が続きます。ルツ記では、モアブ人の娘ルツが、ボアズの妻となり、そこからダビデが出てきます。そして主が選ばれたこの王が、イスラエルの王としての系譜になるのです。

それが、獅子、ライオンに喩えられています。聖書の中でも、獅子が動物界での長のように描かれています。獲物に襲いかかる勇猛さとその力。また、平安のうちに伏している堂々な姿です。そして、主イエスが、ユダの獅子と呼ばれます。「黙 5:5 すると、長老の一人が私に言った。「泣いてはいけません。ご覧なさい。ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利したので、彼がその巻物を開き、七つの封印を解くことができます。』」

¹⁰ 王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。

ダビデ以降、王権が続いていました。ついに、「シロ」が来ます。新改訳 2017 は、「彼がシロに来て」と、シロが場所であるかのように訳されていますが、人物です。共同訳はこうなっています。「シロが来るときまで、もろもろの民は彼に従う。」シロは、メシアだと言われています。

興味深いのは、ダニエルの預言です。9 章に、油注がれた者が絶たれることが書かれています。紀元 70 年に、ローマによってエルサレムが滅び、それから諸国の民にエルサレムが踏み荒らされることになりました。そこで、メシアが来られて、王権が回復し、諸々の民がこの方に従うのを、ユダヤ人たちは待ち望んでいます。そこで、ダニエルの預言「メシアが絶たれる」ことについて、イエスにあって成就したと、新約聖書の証言から分かるのです。ユダヤ人は、これからメシアが来ると思って待ち望んでいますが、私たちはすでに来られて、再び来られるのだと信じています。

¹¹ 彼は自分のろばをぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ。彼は自分の衣をぶどう酒で、衣服をぶどうの汁で洗う。¹² 目はぶどう酒よりも色濃く、歯は乳よりも白い。

メシアにとって、ろばの子についての預言がゼカリヤ書にあります。「ゼカ 9:9 娘シオンよ、大いに喜び。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」そう、これはキリストの預言です。イエスがオリーブ山から、ろばの子に乗ってエルサレムに入城されました。それから、衣をぶどう汁で洗うことについては、敵の返り血を浴びることについて、イザヤが預言しました。黙示

録 19 章 13 節には、「**その方は血に染まった衣をまとい**」とあります。こうして、ユダに対する祝福には、王として来られるメシアの預言になっていました。

3C 地の豊かさと敵との戦い 13-21

¹³ **ゼブルンは海辺に、船の着く岸辺に住む。その境はシドンにまで至る。**

ここから、とても短い約束と預言を、ヤコブは語っています。初めはゼブルンです。これだけ読むと、ゼブルンの割り当て地が、海岸沿いにあるように見えます。ところが、ヨシュア記 19 章 10-16 節を見ますと、割り当てられたのは、内陸に入っています。聖書地図を見るとよくわかります。カルメル山の麓から、タボル山方面に至る、イズレエル平原の一部になっています。

しかし、ここはちょうど、「海沿いの道」と呼ばれる、ラテン語でヴィア・マリスが地中海沿いから、ガリラヤ湖のカペナウムに行く、そのど真ん中に位置しています。海による交易による富が、そのままこの地に入ってくるのです。イメージ的には、今の築地はかつては海沿いの魚市場で栄えましたが、埋め立てによって内陸に入りました。しかし、その商店街は今でも観光客のにぎわっているところになっているようなイメージです、地理的には離れていても、経済的につながっています。

そして、ここがナフタリと共に、メシアが来られるガリラヤと呼ばれているのです。「イザ 9:1 **しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。**」さらに興味深いのは、エゼキエルの見た幻です。メシアが再び来られて、イスラエルが回復する時、ゼブルンの割り当て地は、地理的にも海に接するようになります。(エゼ 48:26)

¹⁴ **イッサカルは、たくましいろば、二つの鞍袋の間に身を伏せる。**¹⁵ **彼は、休息の地が快く、その地が美しいのを見る。しかし、肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となる。**

ゼブルンが海による豊かさを享受するのに対して、イッサカルは穀物による豊かさに恵まれます。「**二つの鞍袋の間**」にあるろばは、農作物をたくさん抱えている姿です。イッサカルは、ゼブルンを取り囲むように割り当て地があり、イズレエル平原の多くの部分を占めています。今でも、そこはイスラエル有数の穀倉地帯になっています。

ところが、その豊かさゆえに、心地よくなって勤勉に働かなくなります。豊かさを象徴する鞍袋は、奴隷が使役されて担いでいる重荷になっています。ここは、例えば士師の時代、デボラとバラクが、カナン人の将軍シセラと戦った場です。豊かなので、かえってカナン人との戦いを覚えず、虐げられていました。

¹⁶ ダンは自分の民を、イスラエルの部族の一つとしてさばく。¹⁷ ダンは道の傍らの蛇となれ。通りのわきのまむしとなれ。彼が馬のかかとをかむと、乗り手はうしろに落ちる。

ダンは「さばく」という意味がありますが、イスラエルを救う士師であるサムソンが、ダン族から出ました。彼は、ペリシテ人にとっての蛇となり、まむしとなったと言えます。

そしてダン族は、地中海の中腹、今のガザの北を割り当てに与えられましたが、土地が足りないと行って北上して、まったく無防備であったライシュというカナン人の町を襲って、そこを自分たちの町としました。ここでも、敵に戦う者たちでありました。そうやって自分の部族を保ったのです。

¹⁸ 主よ、私はあなたの救いを待ち望む。

ダンのことを預言したら、ヤコブが突然、主の救いを待ち望んでいます。ダン族は、北の境に接しています。それで、部族としては残っていますが、霊的なアイデンティティーに危機が来しました。周囲のカナン人の偶像生活から離れませんでした。北イスラエル王国が始まり、ヤロブアムが王になりましたが、金の子牛礼拝が行われました。そしてアッシリアがやってきて、ダンから滅ぼされていきます。それで、主が救ってください！とヤコブが呼び求めたのです。

ダンの遺跡が、今のイスラエルの北部にあります。そこから東へ車で 5 分もしないところが、ピリポ・カイサリアの遺跡です。そこは、パンというギリシアの神が拝まれていて、またカイサル神殿がありました。そのように、霊的アイデンティティーがかなり危ぶまれているところに、イエスが弟子たちを連れて行き、「あなたがたは、わたしをだれだと思うのか？」と尋ねます。ペテロが、「生ける神の子、キリストです」と告白しました。数ある神々の中で、イエスが生ける神の御子であり、この方に救いがあることが示されました。

¹⁹ ガドについては、襲う者が襲うが、彼は、その者たちのかかとを襲う。

ガドは、ヨルダン川の東岸に割り当て地が与えられました。そのため、モアブ人やアンモン人から絶えず襲われるのですが、ガド人は勇猛に戦います。その姿が、「襲う者が襲うが、彼は、その者たちのかかとを襲う」とあります。

²⁰ アシエルには、その食物が豊かになり、彼は王のごちそうを作り出す。

アシエルの割り当て地は、地中海沿いです。カルメル山の北からレバノンの方面にあります。けれども、農地としても優れています。

²¹ ナフタリは放たれた雌鹿。美しい子鹿を産む。

先ほど、イザヤの預言に、ゼブルンと並んでナフタリの名も出てきました。ガリラヤ湖の北の山地にナフタリ族は割り当て地が与えられます。自由に歩き回れる人のイメージが、雌鹿になっています。ヨシュア記には、ヨシュアたちがハツオルの王と戦いました。「11:10 ハツオルは当時、これらすべての王国の盟主だったからである。」とあり、強大な都市の王と戦ったのです。しかし、その困難な中にあっても、敏捷に動いて打ち勝つことができました。ハバククの預言の最後には、高い所を歩んでいる雌鹿の姿がありますが、ものの見事に難所を歩くのです。

イザヤの預言では、アッシリアの支配を受けて、暗黒の時代が来るけれども、そのガリラヤに光が来る、メシアが来るという預言でした。イエスの弟子たちは、このナフタリの地に住んでいたユダヤ人ばかりです。

4C 若枝からの祝福 22-28

そして、次についてヨセフに対する祝福になります。十二人の中で、最も長い祝福です。

²² ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの、実を結ぶ若枝。その枝は垣を越える。

これがヨセフの生涯を示す言葉です。「実を結ぶ若枝」であります。若枝には、これからいのちを結ぶ可能性を大きく秘めています。ヨセフは、多くの実を結びました。なぜ、実が結ばれるか？「泉のほとりの、実を結ぶ若枝」ということです。泉があるのです。聖書には、数多く、死んでいるものに対して、動いている水が生きていて、それが実をもたらすとしています。ダビデが詩篇で、主のみことばに生きる人は、「流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結び その葉は枯れず そのなすことはすべて栄える。(1:3)」と言っていました。そしてもちろん、イエスご自身が、ぶどうの木につながる、枝として、みことばに留まる者たちを約束していましたし、サマリアの女に対して、ご自身から水を飲めば、その人のうちで泉となり、永遠のいのちに至る水が出て来るとされました。

そして、「その枝は垣を越える」のです。ヨセフは、神を恐れる人でした。神との深い関係から、いのちが出てきました。そして、それが多くの外にいる人々に益をもたらしていました。彼が神を恐れていたので、実にエジプトも、周りの国々も飢饉から救われたのです。これが、実が結ばれることの目的です。自分の内に留めておくことはできません。イエスが、生ける水が自分の心の奥底から流れ出ると言われたように、聖霊の働きは自分の領域を超えて、流れ出るのです。

²³ 弓を射る者は激しく彼を攻め、彼を射て苦しめた。

ヨセフの生涯の特徴の次は、弓から放たれる矢によって、苦しんだことです。兄たちの妬みによ

る矢に射られました。ポティファルの妻の言い寄りという矢がありました。

²⁴ しかし、彼の弓はいつも固く張られ、彼の腕はすばやい。ヤコブの力強き方の手から、そこから、イスラエルの岩である牧者が出る。

ヨセフは、いろいろな矢によって倒れませんでした。それは、「ヤコブの力強き方の手」があったからです。主にあって力を得ました。「主にあって、その大能の力によって強められなさい(エペソ 6:10)」とあります。

それによって、彼はファラオの次の権力者となりました。それが、「彼の弓はいつも固く張られ、彼の腕はすばやい」ということです。けれども、ヨセフは、その権力をもってやたらに、矢を放ちませんでした。固く張られて、いつでも打てるようにしていますが、矢は放っていません。これが、ヨセフの兄たちに対する姿です。絶対的な権力者であります。兄たちに仕返しをしなかったのです。

そして、このヨセフから、「イスラエルの岩である牧者」と言っています。イスラエルのメシアは、岩なる方、救い主です。そして牧者というのは、統治者のことです。先の若枝も、イザヤの預言によれば、メシア預言になっています。「その根から若枝が出て実を結ぶ(11:1)」そして、ヨセフと同じように、キリストは矢によって痛めつけられ、しかし、それで倒れず、よみがえられました。

²⁵ おまえを助ける、おまえの父の神によって、おまえを祝福する全能者によって、上よりの天の祝福、下に横たわる大水の祝福、乳房と胎の祝福があるように。

アブラハムの祝福をヨセフが受け継ぎます。天の祝福とは、雨であるとか、朝露が降りてくるとか、潤いであります。下からの水は、泉の水のことです。潤いが豊かにされます。それによって、乳房と胎の祝福ですが、それが子孫の祝福です。アブラハムには子孫が増えて、ヨセフもエフライムとマナセが生まれ、そこから子どもたちも増えました。

²⁶ おまえの父の祝福は 私の親たちの祝福にまさり、永遠の丘の極みにまで及ぶ。これらがヨセフの頭の上に、兄弟たちの中から選り抜かれた者の 頭の頂にあるように。

アブラハム、イサクへの祝福からヤコブへ祝福が受け継がれました。そのヤコブから十二人の息子へ祝福が及びます。ですから、ある意味、ヤコブの祝福はアブラハム、イサクの祝福にまさるのです。ヤコブから、イスラエル民族とイスラエルの国が生まれるのです。そして、その約束が、「永遠の丘の極みにまで及ぶ」とあります。いつまでも変わらない丘にまで広がります。いつまでも、祝福が残ります。今のイスラエルに至るまで、将来のイスラエルに至るまでそうです。

その祝福をもって、ヨセフが祝福を受けます。兄弟たちから選り抜かれたとありますが、長子の権利をヨセフが受けたということです。

²⁷ ベニヤミンは、かみ裂く狼。朝には獲物を食らい、夕には略奪したものを分ける。」

最後の祝福です。ベニヤミンは、好戦的な性格です。士師の時代に、恐ろしい内戦が起こりました。ベニヤミンが、集団強姦で祭司のそばめを殺しました。大罪を犯したゆえ、他のイスラエルの部族が戦いに出ましたが、ベニヤミンの戦う能力が非常に優れ、多くの犠牲が出ました。そして士師の中にエフデがいます。左利きなのですが、見事にモアブ王を殺しました。

そしてベニヤミンから、イスラエルの王サウルが出ます。ヨナタンもいました。それから、使徒パウロが、ベニヤミン出身です(ロマ 11:1-2)。彼は、イエスに出会う前は、猛烈にキリスト者を迫害していました。

²⁸ これらはすべてイスラエルの部族で、十二であった。これは、彼らの父が彼らに語ったことである。彼らを祝福したとき、それぞれにふさわしい祝福を与えたのであった。

これで、ヤコブが十二人に祝福しました。それぞれにふさわしい祝福しました。

2B ヘブロンの墓 29-33

²⁹ また、ヤコブは彼らに命じた。「私は、私の民に加えられようとしている。私をヒッタイト人エフロン
の畑地にある洞穴に、先祖たちとともに葬ってくれ。³⁰ その洞穴は、カナン
の地のマムレに面したマクペラの畑地にあり、アブラハムがヒッタイト人エフロンから、
私有の墓地とするために、畑地とともに買い取った洞穴だ。³¹ そこにはアブラハムと妻サラが葬られ、
そこにイサクと妻リベカも葬られ、そこに私はレアを葬った。³² その畑地と
その中にある洞穴は、ヒッタイト人たちから買ったものだ。」

ヤコブは、明確に、アブラハムがヒッタイト人から購入した洞穴のところに自分を葬りなさいと指示を与えています。ラケルは、旅の途中で死んで、別の所に葬られていますが、それ以外は、夫と妻、みな葬られています。アブラハムと妻サラ、イサクと妻リベカ、そしてヤコブの妻レアです。今も、ヘブロンに行けば、族長の墓に行けます。

つまり、そこにヤコブがいるということは、神の約束が今もあるのだという証しがあるのです。ここが大事です。ヤコブは、自分の死んだ後も、神の真実の約束は生きていることを、今に至るまで、人々に示す必要がありました。私たちが、なぜ証しを残さないといけないかが分かります。自分が天に召されるのだから、仏式の墓で構わないのではないのです。それを外の人が見たら、自分は

仏を信じていたと思われるでしょう。キリストを信じる者であるということが、目に見える形でも明らかにしないといけません。

³³ ヤコブは息子たちに命じ終えると、足を床の中に入れ、息絶えて、自分の民に加えられた。

まるでヤコブは、自分自身で息絶えるのを制御しているかのようです。息子たちに命じ終えたら、床に足を入れて、それで息絶えています。まるでイエスが十字架の上で、自分の霊を御父にゆだねると言われた後に、息を引き取られました。使命を全うしたので、息絶えたのです。

そして、「自分の民に加えられた」とあります。これは、神の民、天に属する民のことです。ヘブル 12 章で著者は説明しています。「ヘブル 12:22-24 しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、23 天に登録されている長子たちの教会、すべての人のさばき主である神、完全な者とされた義人たちの霊、24 さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る、注ぎかけられたイエスの血です。」旧約から新約、全時代の聖徒たちが、この民に加えられます。

2A ヨセフの継承 50

1B 遺体の埋葬 1－14

1C ミイラ化 1－3

¹ ヨセフは父の顔の上に崩れ落ちて、父のそばで泣き、父に別れの口づけをした。

ヨセフが、父の顔の上で崩れ落ちています。彼がすでに、長子のように動いています。もはや、ルベンではありません。そして、別れの口づけをしています。そしてヤコブ自身、主からベエル・シェバで語られていました。「46:4 そしてヨセフが、その手であなたの目を閉じてくれるだろう。」

² ヨセフは自分のしもべである医者たちに、父をミイラにするように命じたので、医者たちはイスラエルをミイラにした。³ そのために四十日を要した。ミイラにするのには、これだけの日数が必要であった。エジプトは彼のために七十日間、泣き悲しんだ。

ヨセフは、ヤコブがヘブロンで葬られるためには、遺体をそのまま保つためには、ミイラにするしかないと思ったのでしょう。エジプト人のミイラの技術は有名ですね。そして、エジプト人は、なんと彼のために七十日間、喪に服しました。七十という、神の数字ですね。ヤコブもヨセフにあって、エジプトで敬われていたということです。

2C エジプト式の葬儀 4－14

⁴ 喪の期間が明けたとき、ヨセフはファラオの家の者たちに告げた。「もし私の願いを聞いてもらえ

るなら、どうかファラオにこう伝えてください。⁵ 父は私に誓わせて、こう申しました。『私は間もなく死ぬ。私がカナン¹⁰の地に掘った私の墓の中に、そこに、私を葬らなければならない。』どうか今、父を葬りに上って行かせてください。私はまた帰って参ります、と。』⁶ ファラオは言った。「おまえの父がおまえに誓わせたとおり、上って行って、おまえの父を葬りなさい。」

ヨセフが、ファラオにエジプトを出る許可を得ています。ヨセフはいつもは、ファラオに対して力を持っていました。彼の家を司っているのは、ヨセフ自身だからです。すべてをファラオは任せていました。それでヨセフはかえって、自分をファラオより下にするために、自分自身ではなく、ファラオの家の者に告げて、仲介を入れて懇願しています。自分がしもべであることを示すためです。それで、ファラオの意志で、カナン¹⁰の地に行くようにしました。

ヨセフは、ここでカナン¹⁰の地に戻る時ではないことをはっきりと知っています。戻る時には、主が戻らせてくださると信じていたからです。

⁷ それで、ヨセフは父を葬るために上って行った。彼とともに、ファラオのすべての家臣たち、ファラオの家の長老たち、エジプトの国のすべての長老たち、⁸ ヨセフの家族全員、彼の兄弟たちとその一族が上って行った。ただし、彼らの子どもたちと羊と牛はゴシェン¹¹の地に残した。

まず、この旅は、エジプトのファラオの家で行われていることが分かります。あくまでも、エジプトの葬儀として行っています。次に、ヨセフの家族は全員、いっしょです。彼らはヨセフ以外、一度も、カナン¹⁰の地に住んだことがありません。この機に、見せなければいけないと思ったのでしょうか。そして、兄弟たちですが、子どもたちと羊と牛はゴシェン¹¹の地にいました。これはヨセフが敢えて、自分たちがカナンに移り住むことはないことを、はっきり意思で示しました。エジプトに戻ってきます。

⁹ また、戦車と騎兵も彼とともに上って行ったので、その一団は非常に大きなものであった。

旅において、外敵から守られるためです。

¹⁰ 彼らは、ヨルダンの川向こう、ゴレン・ハ・アタデに着いて、そこで、たいへん立派で荘厳な哀悼の式を行った。ヨセフは父のため七日間、葬儀を行った。¹¹ その地の住民のカナン人は、ゴレン・ハ・アタデのこの葬儀を見て、「これはエジプトの荘厳な葬儀だ」と言った。それゆえ、その場所の名はアベル・ミツライムと呼ばれた。それはヨルダンの川向こうにある。

普通、ヨルダンの川向こうというと、イスラエルから見ての川向こうなので、東岸を指しますが、これは、今のヨルダンから見ての川向こうです。おそらく、一行はそのままエジプトから北上してヘブロンに行ったのではなく、イスラエルの民の約束の地への旅のように、モアブの地のほうに回って、

それからヨルダン川を渡河した可能性があります。いずれにしても、ヨルダン川の西岸のところで、七日間の葬儀をしました。そして、これが、エジプトの荘厳な葬儀でした。

¹² ヤコブの息子たちは、父が命じたとおりに父に行った。¹³ 息子たちは彼をカナンの地に運び、マクベラの畑地の洞穴に葬った。それはマムレに面していて、アブラハムが私有の墓地にしようと、ヒッタイト人エフロンから畑地とともに買ったものである。¹⁴ ヨセフは父を葬った後、兄弟たち、および、父を葬るために一緒に上って来たすべての者たちとともに、エジプトに戻った。

そうです。エジプトに戻る意思を明らかにしていました。ファラオの家の者たちと共に行き、エジプトの葬儀にして、それで、墓にヤコブを葬ったら、エジプトに帰るのです。

2B 兄弟たちへの養い 15-26

1C 慰めによる和解 15-21

¹⁵ ヨセフの兄弟たちは、自分たちの父が死んだのを見たとき、「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪に対して、仕返しをするかもしれない」と言った。¹⁶ そこで、彼らはヨセフに言い送った。「あなたの父は死ぬ前に命じられました。¹⁷『ヨセフにこう言いなさい。おまえの兄弟たちは、実に、おまえに悪いことをしたが、兄弟たちの背きと罪を赦してやりなさい、と。』今、どうか、父の神のしもべたちの背きを赦してください。」ヨセフは彼らのこのことばを聞いて泣いた。

父が死にました。父がいなくなれば、自分たちの心にあることがあらわになります。それまでは、父がいたから抑えられていた感情が、ここで噴き出します。それが、兄たちの恐れでした。兄たちは、父がいたから、ヨセフは自分たちに害を与えないのだろうと恐れていました。その恐れが、今、出てきたのです。

しかも、ヨセフが長子の権利を受け継いでいます。そして長子の権利を持っていることが、名ばかりでなく、彼には力も富もあります。兄たちを殺すことさえできます。ですから、兄たちは、父から生前に、遺言を受け取っていました。兄息子たちが父にお願いしたのでしょう。

しかし、ヨセフの心は違いました。彼はいろいろな意味で、泣いたことでしょう。確かに、彼らのしたことは悪であり、その悪に苦しんでいる姿を見て、悲しくなりました。なぜ、そんなことをやったのか、と。しかし、そうした苦しんでいる彼らをかわいそうに思ったのだと思います。

¹⁸ 彼の兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して言った。「ご覧ください。私たちはあなたの奴隷です。」

¹⁹ ヨセフは言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか。²⁰ あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。²¹ ですから、もう恐れること

はありません。私は、あなたがたも、あなたがたの子どもたちも養いましょう。」このように、ヨセフは彼らを安心させ、優しく語りかけた。

ここを、午前礼拝で学びました。彼らはヨセフを奴隷として売ったのだから、奴隷になるに値するのです。しかし、ヨセフは優しく語りかけ、彼らを養うと安心させました。ヨセフは、改めて兄たちとの和解を確認しました。

そこに基づいているのが、神への畏れです。神がすべてに主権を持っておられ、悪をも良きに計らってくださるためだったのだということです。確かに兄たちがしたことは悪い。しかし、それを人々を救うために、神が計らいとしていたのだから、私がとやかく言えることではない。また、兄たちに仕返すなど、神のようにふるまうことだと。人をたやすく裁く風潮が世にありますが、私たちキリスト者は厳に戒めないといけません。それは、神の専権事項なのです。

こうやって、創世記は人が罪を犯したところから始まり、その罪の赦しと和解を見せることで、神ご自身が終わりの日に、キリストにあって人々と和解するという、救いの全貌を見せておられます。この世界は、被造物は、キリストの十字架にあって神と和解しました。その働きが完成されるところに、向かっています。私たちが、そのことをことばと行いをもって示すのです、証しするのです。

2C 約束の地への信仰 22-26

²² ヨセフとその一族はエジプトに住み、ヨセフは百十歳まで生きた。²³ ヨセフはエフライムの子孫を三代まで見た。マナセの子マキルの子どもたちも生まれて、ヨセフの膝に抱かれた。

最後は、ヨセフ自身の人生とその終わりです。主は、ヤコブが預言したように、ヨセフに子孫の祝福をくださいました。なんと曾孫までを見せてくださいました。

²⁴ ヨセフは兄弟たちに言った。「私は間もなく死にます。しかし、神は必ずあなたがたを顧みて、あなたがたをこの地から、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせてくださいます。」

ここの兄弟たちとは、兄弟たちの家族を含むでしょう。もしかしたら、ヨセフより先に死んでいる兄弟たちもいるでしょう。しかし、その子や孫たちに言い伝えています。

²⁵ ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上ってください」と言った²⁶ ヨセフは百十歳で死んだ。彼らはヨセフをエジプトでミイラにし、棺に納めた。

ヤコブと同じく、ヨセフもここエジプトは故郷ではないと証しました。それで、父と同じくミイラにし

て、子孫がエジプトを出る時に、ミイラを担いで出て行ってほしいと誓わせています。事実、出エジプト記を見ますと、モーセが、ヨセフのミイラを担いでいる姿が出てきます。(出エジプト 13:19)

このようにして、みながここは故郷ではなく、寄留しているだけなのだと証ししたのです。「ヘブル 11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」私たちも同じように、ここでは寄留者であることを告白しつづけましょう。